

蛇神様に嫁がされ、

種付けされて、産卵させられました

花室かんろ

注意書き

- この作品は成人向け作品です。十八歳未満の方の閲覧を固く禁じます
- ハート喘ぎ、濁点喘ぎなどを含みます
- 合意のない性行為の描写がありますので、苦手な方はご注意ください。現実でのそのような行為を推奨、肯定する意図はまったくございません

蛇神様に嫁がされ、種付けされて、産卵させられました

第一章 蛇神の住む家

春とは名ばかりでまだ寒さの残る四月、響子は輿こし入れした。

輿入れというのも名ばかり。要するに生け贅だ。

四方を完全に目隠しされた輿の中、響子の意識は、数時間前までいた故郷に戻る。

そこそこ大きな市の片隅の、小さな町。その中にある、小さな商店街。住宅街に囲まれた立地にあり、八百屋、魚屋、個人経営の飲食店などの、住居兼店舗が並んでいた。東京に負けず劣らず賑わっている都市の中心部と打って変わつて、下町という言葉がよく似合うあの町では、主な買い物先はその商店街だった。道向かいに大型の商業施設はあつたが、

そちらは加工食品や衣料品などに力を入れていたので、上手く棲み分けはできていたようだ。

その商業施設が急に、事業拡大のために商店街に立ち退きを命じてきたのだ。

店主も、その家族も、こぞつて抵抗した。しかし金と権力というわりやすい力には敵わない。気づけば、あとは神頼みしかない状況まで追い詰められていた。

（そんなに、悪い話じやなかつたと思うんだけどな……）

響子は軽く首を振つた。響子には、商店街を守ることへの固執をそこまで大事なものに思えなかつた。そして、そんな自分が嫌だつた。

（きっと、厄介払いもできるし一石二鳥、つてことで私が選ばれたんだ

ろうなあ……）

どうしようもなく溜め息が出る。

そうだ、自分は生け贋なのだ。

現実逃避じみた回想から一転、現在置かれている状況を再確認する。
自分は生け贋に選ばれて、それでこれから……。

これから、どうなるのだろう？

若い娘が神様の生け贋になるとなればその末路は、食べられるか、慰
みものになるかだと相場は決まっている。着替えなど、必要な荷物は用
意させられたということは後者だろうか。命だけは助かるのだろうか。
響子は側のスクールバッグに視線をやる。

やめよう。こんな思考も「もし神様が本当にいるのなら」という妄想

で、先程までの回顧同様に現実逃避にしかならない。

今は、逃げなければ。

今や唯一の所持品になってしまった鞄の持ち手に手をかけ、響子は今度こそ本当に思考を現実に戻す。

昼過ぎに山に連れてこられてからどのくらい時間がたつたのか、正確にはわからないが、まだ外は明るい。日が出ているうちでないと危険だ。そつと外を覗いて、見張りなどが付けられていなければ逃げ出そう。どこに向かうかは、その後決めればいい。

暗幕で裏打ちされたすだれの隙間から外の様子をうかがう。

響子は、自分が見知らぬ場所にいると気づいた。

輿から出て背側には大きな木の門があり、その戸はぴつちりと閉まつていた。扉の両脇からは漆喰の壁が続いており、それが囲む面積は横幅ゆうに五十メートルは超える。奥行きはわからない。果てが見えないのだ。

前方二十メートルほど先には大きなお屋敷。門から玄関まで一直線に、そこだけ舗装されて、道ができていた。

輿が動かされた感覚は無かつたはず。

響子の思考はそこで止まり、今の状況にまともな説明づけができない。

それでも、自分はあの屋敷に行かねばならないと、それだけはなぜか確信が持てた。

愛しい母校の鞄を体にぴつたりと密着させるように抱え、玄関まで向

かう。表札もインターほんも無い。許可なく立ち入るのは憚られて、その場で呼びかけた。

「ごめんください」

その声の震えに、響子自身驚いた。

先ほどまで気づかなかつた心臓の音が、体を内側から揺らす。どうやら頭が思考放棄している間も、本能は仕事をしてくれているらしい。体の緊張が、脳にまでじわじわ広がつてくる。もつと慎重に行動すべき異常事態に置かれているのだと、今更気づいた。

しかし時すでに遅く、奥からは足音がしていた。

引き戸を開けて出てきたのは、青年だつた。響子よりも少し年上だらうか。

長い黒髪はゆるく結えられ、白い肌とコントラストをなしている。形のよい眉、通った鼻梁、薄い唇。体型の分かりづらい着物だが、おそらくすらりとしたスタイルをしているのだろう。その人間離れした美貌以外は、普通の人間となんら変わりのない姿だった。

「お前が、生け贋か？」

「は、はい……」

すると男は呆れたような顔をした。

「神への供物には若い生娘贈つとけばええ思うたんじやろ。安直な……ため息混じりの発言に、自分が歓迎されていないこと悟る。

「ごめんなさい。あの、私じや、お気に召さなかつたつてことですか：

…?

男は響子の顔を見て一瞬黙り込むと、今度は氣の毒そうに眉を下げた。

「なんじや、何も聞いとらんのか。まあええ。とりあえず上がり」

促されるままに玄関に入る。そうして通されたのは意外に現代的な部屋だった。おそらくリビング兼ダイニングで、ソファと食卓用の椅子との両方が置いてある。ソファの前にはローテーブル——冬にはこたつになるのだろう——もあつたが響子は椅子に座らされた。

「眷属からの報告で事情はわかっちょる。地元に根付いて生きてきた商店街が地上げの危機にあつた。お前らはわしに助けを期待しとる。大体こんな感じじやな?」

席に着くなり男は話しだした。いろんな時代の、いろんな場所の言葉が混ざつたような口調だ。まだ状況は飲み込めていないものの、響子は

頷く。

「はい。あの……、あなたは神様、なんですか？」

男も鷹揚に頷いた。

「この山で祀られとる蛇神じや。そしてお前はその生け贋」

最後の単語で響子の緊張が増した。

「だがな、別にわしが若い娘差し出せ言うたわけじやない」

その言葉をどう受け止めればいいのか、分かりかねた。

「わしはあるの商店街がどうなろうと、開発が進もうとどうでもええんじや。ただ人間に捧げ物をされたらそれは神として答えないかん。ああ、捧げ物はお前のことじやない。お前が来る前に、米やら野菜やら酒やらが奉納された」

蛇神はそこで言葉を切った。今まで無表情で事務的な説明をしていたのが、真剣にこちらを見つめてきたので、響子はいよいよ息が詰まつた。何か、恐ろしいことを今から言われる気がする。

「人間に加護を与える神通力を使うためには、卵が必要なんじや」

「たまご……」

相槌代わりに、とうむ返ししかできない。

「そうじや。人間の女が産む卵」

蛇神の言葉を聞いて、響子の喉からひゅん、と妙な音が出た。

「お前は卵を産むための要員として送られてきた」

その続きは、彼は目を伏せながら言つた。

「供物じやなくて、まあ……、道具としてじやな」

どうやつて卵を孕み、産むのか。響子の頭はそれのみで占められた。大方予想はついているが、あまりにも恐ろしくて認められない。「そんな怖いことはしない」と言つて欲しいがためだけに確認したくなる。

「わ、私、卵産めないです」

「わしの精を胎で受けければ孕む」

やつぱり……。最悪の、しかし予想通りの返答が返つてきて響子は絶望した。だから経産婦の方が安全だとなんとか言つているが、響子の耳には入らない。

蛇神はまた眉を下げ、憐れむような表情で続けた。

「さつきも言つたがわしはどうでもいい。もしお前がどうしても嫌で、地上げもどうでもええ言うんならこのまま帰すこともできる。商店街の

ことは諦めてもらわなかんが……

「いえ、頑張りたいです！」

蛇神は目を見開いてこちらを見た。

自分の性格というか癖というか、流されやすさと気弱さのせいで、響子の絶望はより深まつた。

この性格のせいで、いつも損をしてきた。今回も……。

「私は、商店街を救いたいです！」

「いや、だが……」

蛇神は何か言いたげだったが、一度口を閉じ、言い直した。

「そうか、それならよろしく頼む」

第二章 初めてのまぐわい

湯船につかっていると、緊張感も警戒心も薄れてしまう。

危機的状況も忘れ、昼間に案内された屋敷の見取り図など思い浮かべてしまう。

えっと、玄関入って右手が今いるお風呂で、左手が客間でしょ。まつすぐ行けばリビングで、そこを通り抜けたら廊下。目の前が蛇神様のお部屋で、右が私に貸してくださった部屋。さらに右には階段でその上には……。

響子の心臓がドクンと鳴った。のぼせているわけではない。

二階には、寝室があつた。

今からそこで、抱かれるのだ。

心臓がうるさく、もう湯船につかってなどいられない。体を拭く時も、用意された寝巻きを着る時も、息は上がつて体は震える。

「あの、お風呂、頂きました……」

恐れ多くも一番風呂を譲つてもらったので、次は蛇神の番だ。

「そうか、わしもすぐ行くけん待つとれ」

リビングを抜けて、右側に階段、左側には廊下が続いている。蛇神の話によると離れに続いているらしい。離れば祈祷のための空間なので入るなども言われた。

響子は二階に上がり、寝室に入る。ダブルベッドは情事を強く連想させる。その上で膝を抱え所在なく待つていると、やがて蛇神も上がつて

きた。

「まあまでは、横になれ」

「よろしくお願ひします」くらいは言つたほうが良いのだろうかと迷つてゐるうちに、蛇神が先に口を開いた。響子はそれに従つて仰向けになつた。

覆い被さられて泣きそうになつたのを見て、彼はどうしたものかと思案顔になつた後、響子の頬を撫でた。

「お前の身体を貪ろういうわけじゃないんじや。初めてなのも分かつとる。なるべく負担の無いようにはするけん、そう怖がるな」

正直そんな言葉でほぐれるような恐怖ではないが、とりあえずは返事

をする。

「はい……。んっ!?」

響子の言葉も聞き終えたのか分からぬほどのタイミングで、唇が重ねられた。

すぐに舌が侵入し、上顎を丹念に舐められる。

「ふんッ!?ん、うん、ふ……ッ」

くすぐったい感覚に、逃げ出したくなる。肩も腰も勝手にビクビク跳ねて、捻れて、この感覚をやり過ごそうとする。

「はあっ……！ぐっ」

息が苦しくなってきたあたりで解放されたが、いつの間にやら^{あわせ}か

ら侵入してきていた手が、胸から腰にかけてゆっくりと撫でさすり始め

た。

蛇神が何も言わないのが、余計に恥ずかしい気もするし、返つて助か
つた気分にもなる。一体相手はどんな表情をしているのかと、響子は固
く閉じていた目を開く。

無表情に、しかしこちらの反応を一つたりとて見逃すまいとばかりに
見つめる目と、ばつちり目が合つてしまつた。

「いッ……!? うう、い……」

同時に胸の先端をきゅっと摘まれ、不思議な感覚が身体を走る。キス
ともまた違う快感で、さつきまではじわじわ、ふわふわした感覚だつた
のが一気に鋭く、深くなつた気がする。

寝巻きを開かれて露わになつたデコルテに舌が這わされた。生ぬるさ

とねつとり感は下へおりていく。

そしてついに、乳蓄に到達した。

「んや、……ああツ、ふ、くうん……。あツ、こし、こしがあ……ツ！」

「腰がどうした？」

胸の悦楽もさることながら、どこよりも、腰がたまらなかつた。触られてもいなはずの腰が、熱くて、疼いて、そして気がついたら、勝手にくねらせていた。

「わかんなくて、こし、へん……」

混乱と不安でいっぱいになる響子を見て、この先もできると判断したのか、それとも生け贅側の都合などお構いなしなのか、蛇神は響子の帶に手を伸ばした。

ショーツも脱がされ、生まれたままの姿で脚を広げさせられて、響子の口から「ひイツ……」と悲鳴に近い声が上がる。

意外なことに、恐怖は長続きしなかった。蛇神が陰核に触れた瞬間、響子の意識のすべてはそちらに持つていかれた。

「あんッ！ああッ！ダメえつ……んつ、んッ……！」

先程までの快楽とは比べ物にならない。口から漏れる声も、何かが明らかに違っている。自分の口からこんな……甘く、媚びた声が出るのが恥ずかしく、響子は手で口をふさぐ。

「我慢せんでええ」

そう言うと蛇神は響子の手を外させ、自分の指を咥えさせた。

「喘いだほうが身体もほぐれるじやろ、多分」

蛇神の手のせいで口が閉じれない。その上、口内の指が舌に当たる。

（舐めたい……）

もうまともな思考もできない響子は欲に負け指を舐め始めたが、蛇神は咎めなかつた。

「うう……♡えふ、んむつ、んう…………んツ！んツ／＼／＼♡♡」

舌先と陰核に与えられる快感に夢中になつていると、いきなり何か、大きなものに襲われた。

「それ」が襲つてくる直前に一瞬、波が押し寄せてくるような感覚を味わつたかもしれない。しかしそれの正体が分かる前に、シビビ……！と刺激的すぎるものが響子の身体の隅々まで行き渡つた。

「ふう……ふう……」

とりあえずは両手を身体から離され、刺激からは解放された。

抜けきらない余韻の中、今のものの正体が分からずに入ると、蛇神が

答えを教えてくれた。

「おお、初めてで果てたか。今日中に最後まで行けそうじやのう」

「は、て……」

「そうじや。今風に言うたらイク、か？慣れたらもつと気持ちよくなれるぞ」

これが絶頂で、これより上もあるのか……。響子は既にやみつきになつて、もう一度さつきの感覚を味わいたくなつていた。

蛇神の指が、再び秘部に当たつた。

「まずは指一本からじやな」

そこがおそらく膣か、なんて考える余裕は、指が侵入を始めた途端無くなつた。

「ふぐつ、うぐう……」

強い異物感。これが、ここに何かを挿れる行為が、自然なことだとは思えない。

「痛いか？」

響子は首を横に振つた。

「あつぱくかん、いき、くるし……」

それだけ絞り出すのもやつとだ。痛みこそ無いが、内臓が下から押し上げられているようで、浅い息しかできない。

「そうか……。力抜いて、気持ちいいところに集中せえ」

蛇神は再び胸の薔を口に含み出した。

「あっ……はっ、はあ……ツ。ツふ……」

気持ちいい。

挿入と同時に甦った恐怖心がほどけるとともに、膣壁もほぐれていつてている、気がする。

ある程度ピストンをしても呼吸の苦しさが見られなくなると、蛇神は二本目の指をあてがつた。

ずぶ、と入り始めるや否や、痛みと恐れがやつてきた。

「いやっ！ やだ！ やだ！ おわる！」

響子の明らかな拒絶反応を見て、蛇神も動きを止めた。

「落ち着け。大丈夫じや。さつきもすぐ慣れたじやろう？」

なだめる言葉も、この恐怖を前には届かない。

これ以上やれば裂けてしまう、本能的にそう感じたのだ。

「やだ抜いてよお……もうおわりがいいです……」

蛇神は眉を下げて、それでもこう言えれば頑張れるだろうとばかりに微笑みを浮かべながら説得を続けた。

「卵はどうするんじや？お前の故郷は？」

「いるないい……もういるないからあ……！」

泣きそうな様子に、このまま進むのは無理だと判断したのか、蛇神は指を二本とも抜いた。

ようやく恐怖から逃れた響子は、身を守るように横向きになり、丸まつて震えた。

「……悪いがこのまま終わらしてやることはできん」

キッパリとした口調がひどく冷たく感じる。先程の、あやすような声ではない。きっと、響子の意思や都合を汲んでの融通はしてもらえないのだ。

「理由は二つ。お前は自分の意思で、ここに残つて卵を産むことに決めた。今日半日この家で過ごし、食事も摂つた。もう役目も果たさずに帰してやることはできん。これはわしの意地が悪いのではない。人間の信仰と神の加護、この二つはお互に裏切ることなどできんのじや。お前はわしが加護を与える手助けをすると決まつてしまつたんじや。二つ目の理由はな、今やめたらお前の中で、まぐわいは怖いものだと植え付けられてしまう。そしたら次するときはもつと怖いぞ。いつまで経つても最

後までできんようになる」

そんなことを言われても、既に恐怖に支配されてしまったのだ。生け贅の仕事を頑張ると言ったのも、所詮本心ではない。だから、そんな決意とも言えないものは、簡単に折れてしまう。

ぐずりながら無言の抵抗をする響子に、蛇神がため息を一つ吐いた。

「ほれ、脚ひらけ」

再び響子を仰向けにさせた。

その間も響子はずつと黙り込んでいた。

蛇神の言うことも、理屈では分かる。それでも何かを恨まずにはいるれない。

——嘘つき。もう引き返せないなんて聞いていない。

——違う。この人はちゃんと確認してくれた。「生け贅としてここに残る」と言つたのは自分だ。

——だつてそれは……。

——また他人のせいにして言い訳して、自分の弱くて悪いところは棚上げするつもり?

自己弁護と自己嫌悪で胸は押し潰されそうなほど苦しく、誰かを……蛇神を悪者にすることで楽になりたくなる。

でもそれができるほど馬鹿でも、自己中心的でもない。

「ぐうつ……」

「これは痛くないな?」

蛇神の問いに、こくこくと頷いた。

響子の蜜壺を貫く指は一本。そして目下のところ、増える様子はない。動きもゆっくりで、響子の反応を見ながら、さぐり探りといつた感じだ。負担は軽くなるようにする、と言つてくれた。そしてそれは単なる気休めではなかつたようだ。

——これじやあ恨めない。こんなに誠実な人を、憎めない。

まだナカでの快楽は上手く得られないが、もう痛くはない。

挿入した瞬間のようなうめき声も上がらなくなつたからか、蛇神の指の動きも徐々に速まつていく。

「んっ、うっ……」

気持ちいいとは思えないのに、身体はビクンビクンと跳ねる。漏れる声も、嬌声とはほど遠い。

痛みも快樂を伴つていない、ただただ強すぎる刺激を与えられ、響子は体力も氣力もすり減つてゆく。

それでも次第に、ぎゅっと閉じられた瞼の裏、針で開けられた小さな穴から暗闇に差すような、微かな光が見えた気がした。

これがきっと快樂なのだ、と分かつた瞬間その光は、線香花火の最期を巻き戻したように、秘部から脳天へと上がつていった。

「ん～～～ツ、んん～～～～ツ♡♡」

頭が全部真っ白にフリーズして、考えていたこと全部取り上げられて空っぽになつた。

思考と一緒に身体も、存在自体も霧散していきそうなのが怖くて、シーツを掴む。背を仰け反らせて、頭を振り乱す。

「つはあ♡ああ……♡はあ……♡」

暴れた拍子に当たつた物に頭を擦り付けると、蛇神の左手だつた。そ
う分かつた後も擦り寄るのをやめられない。もうなんでもいいから甘え
たくて仕方ない。

蛇神も受け入れてくれているようで、響子の頭を撫でた後は頬を手で
包んだ。指の背や爪でくすぐられて、響子は目を細めた。

「上手じや。そのまま力抜いとくんじやぞ」

ズズズズ……、と二本目が入つてくる感覚があつたが、今回は痛くなかつ
た。

「んつ……♡はあ……ん……♡」

下半身に勝手に力が入つて、腰がくねる。

そうすると蛇神の指の当たりどころが調整されて、たまらない。指が動くたびに、触られているところが熱くなる。

「ああっ♡そこ、だ、めえ……♡きゅーけ、いつかい、きゅーけいい♡」

「そうか、ここか」

また指を増やされ、バラバラと動かされる。

「あんツ♡やあつ♡」

そこも、ここも、きもちいい。

「あーツ！きもちい、きもちいい♡あつ……？」

せつかく気持ちよくなつてきたのに、蛇神は指を抜いた。

「う……？」

疑問と、少しの切なさを込めた目で見ると、蛇神は目を細めた。自分

の着物に手をかけながら言う。

「そう睨むな。そろそろええ頃合いかと思うただけじゃ」

そして現れた肉棒は、太く、長く、そり返っていた。

「あつ……ひイン……♥」

脚を広げられ、受け入れる体勢をとらされても、響子に恐怖心は生まれなかつた。

アレで今からどうされてしまうのか……。可愛がられることを想像しても、いじめられることを想像しても、体は疼いて、ナカが急かすよう

に、ひとりでにキュッとなる。

蛇神の剛直が蜜口にあてがわれた。

「あ、あ……♥」

「挿れるぞ……」

ゆっくりと挿入が始まった。

「いやあああああ♡あああツ♡」

指よりも太く、硬いソレは、響子の脳内をいとも簡単に塗り替えていく。もう一面が真っ白で、快楽のことしか考えられない。

「おお、すっかり受け入れる準備が出来ちよるわ」

響子が悦んでいるのを確認して、蛇神は腰を動かし始めた。

「あああああつ♡うああん♡」

段差でカリカリ引つかれるのが気持ちよくて、だらしなく開けっぱなしになつた口から甘い声が出てくる。

その上、突かれるたびに指では届かなかつたところまで暴かれる。押

し広げられる感覚は、後戻りできなくなる恐怖を連れてきたが、響子の脳はそれすらも背徳的な快感として受け取ってしまう。

「おくつ♡おくがあ♡♡」

「そうか、お前は奥が好きか」

深いところで小刻みなピストンをされると、瞼の裏がチカチカと明滅した。

アレが近づいてくる……。

「うぐ、イグう……ツ♡」

しがみついて絶頂の予感を伝えると、蛇神はストロークを少し長めに戻した。

「わしもそろそろじや。出すぞ……つ。ええな?」

返事をする前に、肉茎が痙攣する。

「つく……」

「どぴゅつ、どぴゅつとリズミカルな射精に、とどめを刺された。

「んああああ～ツ♡♡あちゅいのおおお♡♡」

頭も、きつとお腹の中も真っ白。身を捩ろうと背をのけ反らせようと、この熱からは逃げられない。お腹の中に焦げ目を付けられたような感覚に陥る。

「よう頑張った。抜くけん最後、あとひと頑張りじやぞ」

そう言うと蛇神はペニスをゆっくり引き抜く。

「ひうつ……!?」

きつく締まつた膣壁が、肉棒と一緒に持つていかれそうになる。

挿入時のみならず取り出す時もこんな、辛さと快感の入り混じるたまらない気持ちにさせられるのかと驚いたが、幸い今回はすぐに終わつた。

（これで、終わり……？役目果たせた……？）

ずっと強張つていた身体も力が抜け、安堵の気持ちになるとともに睡魔が襲つてくる。

（このまま寝ちやつていいのかな……？なんか、後始末が必要とか聞いたことあるけど……）

しかし酷使した身体も精神も眠気には敵わず、響子はそのまま眠りに落ちた。